

# 本校のオンライン授業の成果と課題

中野雅也

## 1. はじめに

令和2年度はコロナ禍に伴う影響により、教育手法はもとより、学校の役割の変革をも求められる結果となった。ここで改めて、外国語科としての取り組みにも触れながら、本校としてオンライン授業に対応し取り組んだことを整理し、記録しておきたい。

## 2. 土台構築期

4月7日に緊急事態宣言が発令され、本校は6月5日まで臨時休校となった。

当初は、本校としては生徒に各教科から課題を出して家庭学習を促すだけだったが、コロナの感染状況等から、当面の間臨時休校が続くことが予想されたため、オンライン授業開始のための準備を開始した。

まずは東京藝術大学（以下、藝大）全体で、藝大の芸術情報センター（Art Media Center; 以下、AMC）主催の Google Classroom（以下、Classroom）および Google Meet（以下、Meet）を使用した授業運営方法の説明会が全教職員を対象に2度開催された。その後、本校教職員でウェブ会議で討議を重ね、教員間でのオンライン授業開始に向けた研修や情報共有、そして Classroom や Meet に生徒を招待するための準備等を行った。

### 2.1 具体的な準備

AMC 主催のオンライン授業説明会後、まず本校教職員間で、Meet を使ったウェブ会議を試行の上、定期的にウェブ会議を開催し、ゴールデンウィーク後の Classroom および Meet を用いたオンライン授業実施に向けて準備を進めた。教職員間では共有ドライブ機能を活用し、ウェブ会議での議題や質問箱などの設置を行い、Classroom や Meet の開設方法について各教員が作業できるようにした。

また同時に、生徒への連絡方法は藝大メール（藝大アカウント）を通じて行うこととし、その確認のため、オンライン環境の確認（デバイス、無線 LAN の有無、藝大アカウントが有効か否か）を電話で行った。

その後、各科目で Classroom を開設することが決まり、それぞれの科目コードが集約された。同時に生徒用に、クラスコードやオンライン授業のための情報を掲載した Classroom 「藝高授業情報ポータル」が開設され、生徒がオンラインで授業を行う科目コード一覧表、そしてオンライン授業の時間割やヘルプデスク等が設置された。

このようにして各科目で Classroom を開設し、その中でオンライン学習に必要な教材などの情報を掲載したり、録画した動画を掲載したりすることで、教員同士で情報共有しながらオンラ

イン授業に向けて準備を行った。その際、双方向型で実施するのかオンデマンド型で実施するのかを各教科担当者間で話し合い、それに従って、5月中旬の月曜日より2週間おきに Meet を使った双方向授業の時間割が生まれ、一方でオンデマンド型の教科については各担当が授業動画を録画し、Classroom で公開する方法を採った。

外国語科ではコミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ、英語表現Ⅰを双方向型とし、コミュニケーション英語Ⅲと英語表現Ⅱをオンデマンド型として授業を進めていった。

### 3. 授業運営

#### 3.1 臨時休校期間

この期間は、5月中旬より2週間ごとに双方向型授業の時間割が確認され、修正されていった。最初の2週間は、各科目の Classroom への生徒登録が済んでいるかどうかを双方向授業内で確認したり、Meet の招待がうまくいくかどうかなどを、教員・生徒の双方が試行錯誤した期間であった。

この最初の2週間で浮かび上がった問題点の一つに「Meet の招待用 URL が時間経過により変化する」といったものがあった。この点に関しては、AMC より、Google Calendar（以下、Calendar）経由で Meet を立ち上げれば URL が固定することが情報共有された。その情報をもとに、一旦 Calendar を立ち上げ、そこに予定されている授業の Meet をクリックすれば、教員と生徒が「入れ違い」のような形で、それぞれが異なる Meet に入っている、という事態を避けることができた。

外国語科は、各科目の最初の双方向授業・オンデマンド授業では使用教材や授業の進め方などについて説明し、その後は教材の PDF ファイルや録画した動画などを Classroom に掲載し、且つそれらを Meet の画面共有機能で使いながら授業を進めた。

ただ、Meet で生徒全員がマイクをオンにして斉読すると音が反響し、うまくいかないことも分かり、8名から10名ずつのグループごとに1行ずつ音読やリピートをさせたりする必要があるなど、対面授業よりも時間と手間を要するという課題も浮き彫りになった。音読をさせる場面が多い英語の授業では、対面授業で行っていることすべてをオンライン授業でも行える訳ではなく、双方向型授業であっても、通常の対面授業の半分程度の内容しか行うことができなかった。またオンデマンド型授業では生徒の反応を確認することができないというデメリットがある上、スライドの作成に数時間かかることも多く、授業準備のための手間の割には効率が良くないと感じることが多かった。

#### 3.2 分散登校1期

6月8日の週より、各学年の生徒を専攻別にA班とB班に分けて登校させることとなった。授業は午前中のみの40分授業とし、6月10日から開始した。まずは1期として10日間分（2週間分）の時間割を作成し、登校組と在宅組への授業の仕方は、この段階では教科によって扱い方が異なった。教室に三脚とビデオカメラが設置され、キャプチャーボードで教卓に置いたPCと繋ぐことで、在宅組の生徒にも登校組に受けさせている授業を同時配信する方法を採る教科もあれば、A・B班それぞれに同じ内容の授業を受けさせる教科もあった。外国語科は後者の方法を採用し、すべて対面で行った。ただ、次の2週間分の時間割を作成する際、授業を基本的に在宅組にも同時配信する方針が決まったことにより、外国語科もそれに合わせて教室で行う授業を在宅

組に配信する形をとることになった。

### 3.3 分散登校2期

このクール以降、教室での対面授業を在宅組の生徒にも同時配信することになった。それに伴い、配信の方法やコード類の接続方法は先行実施している教科担当から情報共有され、外国語科も習熟度別に同時展開している科目は専任教諭が担当するクラスの授業を配信することになった。

準備としては3.1ですでに述べているが、Calendar上でMeetのURLを取得し、予め作成したAB班ごとのメーリングリストを貼り付け、招待するという方法で、決まっている予定の分までのMeetを予約する、という方法を使った。また授業当日は、対面授業を受ける半分の生徒には通常通りの授業を行う一方で、授業担当者が持ち込んだPCにカメラ、キャプチャーボードを接続することでMeetを在宅生徒にも配信する、という手順で授業を行った。

CalendarとMeetの取得、さらに授業時にPCを持ち込み、機器に接続し、Calendar経由でMeetを立ち上げる、という手間は発生するものの、これにより授業方法はほぼ通常通りに戻ったと言えた。ただし音読を行う場合などは、登校している生徒はその場で音読をすることができるものの、PCの向こう側で授業を受けている在宅組の生徒にとっては、およそ20人といえどもマイクを全員オンにさせるには数が多すぎた。そのため個別で指名して音読をさせるなど、教室にいる生徒を指名しつつ、在宅組の生徒をも指名する、という形を使った。

1期と比較するとPC上の授業準備、設置準備などが発生するものの、「同時配信」という授業形態は授業進度を確保し、また在宅組の生徒にも授業を受けさせることができるという意味でも非常に有効に機能したと言える。この同時配信という形態は全員登校が再開される9月まで継続された。

### 3.4 全員登校開始期

7月末日まで専攻別の分散登校は継続され、9月以降は徐々に規制を緩和していく方向で学校が再開していった。7月末日までは午前中40分だった各授業が、9月以降は45分授業で、かつ6時間目までの時間割で授業を行うことになった。これにより、9月からは実施を見送られていた音楽科目が少しずつ行われるようになった。

そして、9月に特に大きな問題が生じなかったこともあり、10月以降は通常時間割で授業を進める方針が決まった。それ以降、感染対策を取りながら、現時点（12月時点）まで通常の対面授業を行っている。各教室のビデオカメラ、キャプチャーボード、三脚は設置場所から教室の隅に引き下げられている。通常通りに授業を行っている現在、Classroomを併用し、各科目からの連絡や課題提出の指示などを行えるようになった点は今までとは異なる利点であると感じている。

## 4. 成 果

最大の成果は、教員・生徒双方がClassroom等のオンライン授業のシステムに慣れることができた点である。コロナという外的要因によりそうせざるを得なかったのだが、そうでなければ教員も生徒もClassroomによるオンライン授業システムをここまで活用することはなかったはずである。

特に生徒にとっては、コロナの感染拡大以前も藝大アカウントは取得していたものの、そこまで本格的に使用する場面が多くはなかったため、初期設定を済ませたまま、パスワードが分からなくなってしまっている生徒も少なからずいた。しかしオンライン授業の体制が敷かれることに当たり藝大アカウントを取得せざるを得なくなり、それにより生徒全員が藝大アカウントを使用できるようになった点は大きな前進である。またこれにより教員も Classroom や Meet を使用することの利便性に気づき、専門実技のオンライン指導を含め、さまざまな授業で活用されている実情を鑑みると、学校全体としての前進でもあるとも言えるだろう。今後は教科としての活用法をさらに発展させ、授業運営の改善に努めたい。

## 5. 課題

一方で課題も多かった。

第一に、本稿の2.ですでに述べたことではあるが、何もない状態からゼロベースでオンライン授業を開始するための土台を構築しなければならなかった。そのための情報の拠り所として頼るべき窓口については、緊急事態宣言下であったため、すべてウェブ上で自ら使い方を調べるか、メールでの問い合わせだった点は大きな負担だった。

さらに第二には、4月中旬時点では本校としてどうするか、オンライン授業に関してどのように教員間でノウハウを共有するか、といったことに関する指揮系統がはっきりしておらず、オンライン授業に対して、何を準備すべきか不透明だった点である。方針が定まらない限り、在宅勤務で一人PCの前に向かっていく状況下では、オンライン授業開始に向けて準備をするといえど、個人で情報を収集できることには限界がある。何を調べればよいのか分からないということは、本来であれば不要であるはずだった時間を費やすことにもつながったと言える。

このような状況は学校組織として明確に業務がタスク化され、円滑に流れている体制であったとは言えないと考える。今年度のような不測の事態に備えて円滑に動くために、学校全体としての指揮系統の流れを見直すべきであると考えます。

その後幸いにも、ウェブ会議を定期的に行うことによって少しずつ状況を共有できるようになったものの、在宅勤務が続いていた時期においては、結局のところ個人での仕事にならざるを得ず、他の教員と協力して進める、ということもしづらかった点も課題であると考えます。今であれば Meet を用いて、最少人数の2名で打ち合わせをする、ということも可能であるが、まだ今ほど土台が固まっていなかった4月の状況下では、非常に困難を極めたと言ってもよい。

PC や ICT に関する知識や扱い方については、教員間でも多少の差があることは想定されていなければならないことであり、その差を埋め合わせるために組織として協力して業務を進めるような形を採っていくことが望ましい。

また、これは個人としての課題になるが、筆者としては、何よりもまず、3月末時点でようやく調整を終え決定していた4月以降の予定などがすべて白紙撤回となり、外部業者を含め、藝大の各部署とも改めて調整し直すことになった点は、大きな負担であった。ましてや他者と協力しづらい状況下において、メールの送受信数が爆発的に増加し、始業時間にメールを開くと10件以上の未読メールが届いている状況が毎日のように続いたという点は、筆者にとっては非常に大きな心理的負担であった。ウェブ会議を開催するようになってからは少しずつメールの数も減ってきたものの、画面の向こうの相手とのやり取りを繰り返すことは相手の感情を読み取ることができないまま文面から想像することしかできず、それが心理的負担の増大をさらに加速させて

いった側面もあるのではないかと考える。

いずれにせよ、緊急事態宣言という異例の状況下において、組織として系統的に動くことができる重要性、また教職員の心理的負担を考慮することの重要性は、今回のことで非常によく分かった。

教科としての課題は、授業方法の変更を余儀なくされた点であろうか。教授法の開発・研究のよききっかけとなった、とも言えるが、オンライン授業の土台構築と並行しながら、授業準備のために非常勤講師とのさまざまな打ち合わせなどを進めていくうち、昨年度までの授業の方法とは異なる教え方に変更せざるを得なかった。授業方法の改善は教師としての本業であろうが、それには時間とエネルギーを効率よく割くことができる体制が整っていることが望ましい。先が見えない状況下では仕方なかった側面もあろうが、文字通り「仕方なかった」で終わっては組織としての成長が止まるのである。ここに記したこと以上の課題点が潜在している可能性もあるが、このコロナ禍で得ることができた教訓を次年度に活かしてこそ、組織の改善があるのだと考える。